びびき

No.22

ドラム缶工業会会報

ドラム缶工業会の1999年活動方針について

去る1月13日(水)、ドラム缶工業会の賀詞交歓会が鉄鋼会館において開催され、工業会を代表して挨拶に立った安達理事長は、ドラム缶工業会の本年の課題・活動方針について大要以下のように発表いたしました。

◇　◇

皆さん、明けましておめでとう。

さて、昨年の日本経済は長期低迷に苦しみ、回復の兆しが全く見られなかった。我がドラム缶およびペール缶の需要業界にも、大幅なリストラと再編の嵐が吹き荒れ、私どもが年当初に期待した「年末には景気回復」どころか、需要量は月を追って大きく落ち込む結果となった。このため我が業界も秋口には雇用調整助成制度の指定業種としての申請を行わざるを得なくなり、いくつかの工場では10月からこの制度の下で臨時休業などの雇用調整を行うに至っている。

翻って本年であるが、経済が安定成長への軌道に復帰することを衷心から期待するが、政府の0.5％成長の掛け声とは裏腹に、各種研究機関の見通しは極めて暗い。加えて、景気の変動が我がドラム缶業界へ波及するには若干のタイムラグがあることを考えれば、ドラム缶需要の早期回復は期待薄といわざるを得ない。今年は我慢の年となろう。

こうした認識のもと、今年のドラム缶工業会は、次の諸点に重点を置いて活動を展開していきたい。

その第一は、知恵と力を出し合い、なんとしてもこの危機を乗り越えようということである。

長期にわたる未曾有の危機に対し、自らの生き残りをかけた努力が要請されているが、そのためには徹底したコストダウンによる効率的業務運営を目指さなければならない。これを助けるために、工業会としては共同作業、共同研究を積極的に進めていきたい。また、同じドラム缶の仲間としての更生缶業界とは特に密接な連携を深め、近代的な業態への歩みを進めていく。更に、需要業界の皆さんとは相互の理解と共同活動を一層進展させていかなければならないと考えている。

第二には、環境問題に積極的に取り組んでいきたい。

近年環境ホルモンの問題に象徴的に現れてきているように、幅広く環境問題が議論されてきている。ドラム缶は環境に優しい容器というのが我々のうたい文句だが、その名に恥じないよう先駆的役割を果たしていかなければならない。今年は重金属を含む塗料に関し、その問題点の所在及び対応策について積極的に取り組み、更生缶業界と協同して対策の立案と関係業界への理解活動を進めたいと思う。そしてそうした活動とともに、環境に優しい容器としてのドラム缶のＰＲを不断に展開していきたい。

第三に、国際的活動に積極的役割を果たしていく。

日本のドラム缶工業会は、昨年でＩＣＤＭ（国際ドラム缶製造業者連合会）の会長国をおりたが、我がドラム缶工業会が国際的に重要な責任を有していることには変わりがない。今年は米国でＩＣＤＭの国際会議が開催される。この会議の成功に向けて、積極的な役割を果たしていこうで

はないか。

また、AOSD（アジア・オセアニア鋼製ドラム製造業者協会）の具体的組織化にも一歩を踏み出していこうと思う。

第四番目として、工業会50周年の準備を進めていくことを提案したい。

ドラム缶工業会は3年後の2002年には、創立50周年を迎える。派手にやることは考えていないが、この節目に何を記念として行うかよく考え、必要な準備を始めることとしたい。たとえば年史をつくるとなれば、3年程度の準備期間は必ず必要となろう。

以上今年の工業会運営について考えるところを申し述べたが、なんといってもこの時期、皆さんと手を携え苦境を脱しなければならない。会員諸氏の結束とご協力、そして関係当局及び友好各団体、或いはユーザーの皆さん方の暖かいご支援とご鞭撻をぜひともお願い申し上げ、挨拶としたい。

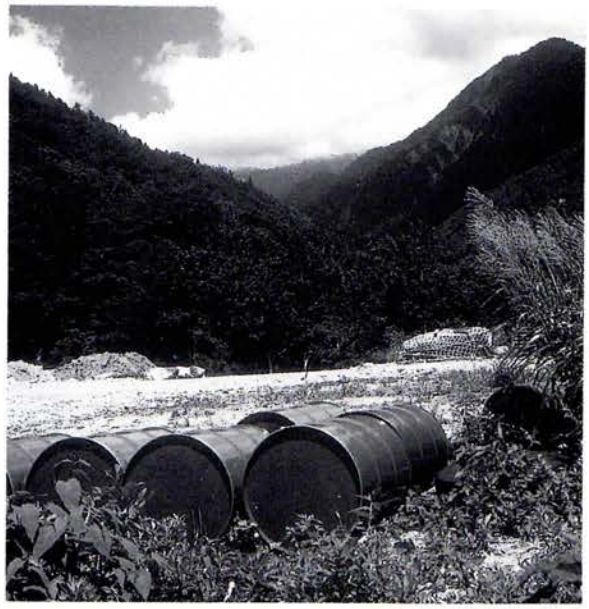
◇　◇

なお、理事長挨拶の後、通商産業省鉄鋼課板谷技術振興室長から力強い祝辞が、続いて日本ドラム缶更生工業会本野理事長からも激励の祝辞が寄せられ、その後和気あいあいの内に歓談、意見交換が行われました。

シリーズ

山間のヘリ基地をささえる燃料ドラム缶

（写真提供：南　徹氏）



ドラム缶こぼれ話

第三話　ドラム缶製造の夜明けを演じた男

大正末期に渡来した鋼製ドラム缶が国産化されるまでには、しばらくの時間を要した。今回は、その経緯を簡単に振り返り、国産化の立役者となった人物にスポットをあててみよう。

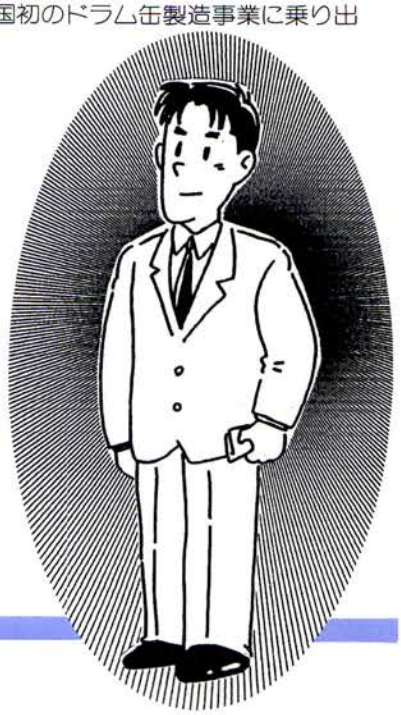
＊　＊

昭和初期、わが国は関東大震災の打撃と世界的な金融大恐慌のあおりを受け、不況の只中にあった。しかし、その不況の中でも、石油精製設備だけは着々と各地に設けられていった。石油精製の発展は、必然的にドラム缶の大量使用を伴う。当時の石油精製会社は高価な輸入ドラムに依存してばかりいられず、やむをえず自家生産に着手した。

記録によれば、1927年（昭和2年）に小倉石油（東京）と永井石油（秋田）、1930年（昭和5年）に日本石油（下松）と小倉石油（横浜）が、それぞれ自家用の200ℓドラム缶の生産を始めたとある。例えば、日本石油の場合はアメリカのナイヤガラ社から製造設備を導入、小倉石油の場合は会田鉄工所（現会田エンジニアリング）に機械を発注して製造を開始した。しかし、いずれも自家使用にとどまり、製品は市場には出回らなかった。強いてあげれば、1932年（昭和7年）に設立された斉藤商店（現斉藤ドラム缶工業）が古缶の再生（修理）をしていた程度で、そのほとんどはアメリカからの輸入に仰いでいた。ドラム缶製造の分野は未開拓のまま残されていたのである。

こうした現実を正しく見抜き、パイオニア精神に燃えて敢然と立ち上がった男がいた。その名を本野吉彦という。1897年（明治30年）10月、長崎に生を受けた彼の夢は実業家として成功することであった。26歳で上京し、亜鉛鍍金工場を経営するとともに、1932年（昭和7年）3月30日、合資会社日本ドラム罐製作所（現日鐵ドラム）を東京市城東区亀戸町1丁目101番地（現日鐵ドラム本社所在地）に設立し、専業メーカーとしてわが国初のドラム缶製造事業に乗り出した。わが国ドラム缶製造の歴史はここから始まったといっても過言ではあるまい。

それから65年後の1997年（平成9年）9月、ドラム缶製造の"父"とも言うべき本野吉彦は99歳の長寿を全うし、大往生を遂げた。未開の原野に種を蒔き、育て、現在の隆盛の基を築き上げた男である。まさに巨星墮つの感が深い。



DATA FILE

平成10年（歴年）出荷実績まとまる

200ℓ缶 前年比で10.2%減

平成10年歴年の出荷実績は、右の表に示す通り、200ℓ缶については、前年比89.8%と1割以上のダウンとなった。この主な要因としては、①日本経済の不振の影響で、主たる需要業界である化学、石油共前年比約1割ダウンとなったこと、②自動車販売、住宅着工の大幅減の影響をもろに受けて、塗料が前年比2割以上のダウンとなったことなどが考えられる。

またペール缶については、前年比93.6%と6.4%の減となったが、全体で94%を占める石油、化学共に6.8%減（石油）5.1%減（化学）とダウンしたためである。

平成10年（1月～12月）ドラム缶・缶種別・用途別出荷本数

単位：千本

缶種＼用途		石油	化学	塗料	食料品	その他	合計	前年比%
200ℓ缶		1,842 (91.0)	8,407 (90.1)	628 (79.3)	153 (106.7)	376 (90.8)	11,406	89.8%
ペール		12,378 (93.2)	10,413 (94.9)	736 (87.5)		717 (90.0)	24,244	93.6
100ℓ缶		10	199	1		2	212	100.6
50ℓ缶			306	2		26	334	104.1
アス缶型		11	8				19	74.2
その他容量缶		3	467		1	15	486	73.7
200ℓ	亜鉛鉄板缶		107	3	1	8	119	97.5
	ステンレス缶		13	微	微		13	80.1
	小計		120	3	1	8	132	95.3
中小型缶	亜鉛鉄板缶		208	1		微	209	88.2
	ステンレス缶		13			微	14	278.4
	小計		221	1		1	223	92.2
合計		14,244	20,141	1,371	155	1,145	37,056	92.2
前年同期比		92.8	92.3	83.5	100.6	92.4	92.2	—
構成比		19.6	70.7	5.1	1.2	3.4	100.0	—

（注）1．200ℓ缶、ペール缶の下段（　）は、前年比。2．構成比は、ドラム缶の出荷トン数の構成比。

コラム

笑いに関することわざは数多くありますが、西洋と日本を比べると西洋では笑いをマイナスに、日本ではプラスに捉えたものが多く見られます。

西洋には、「愚か者の口もとには、笑いがみなぎる」、「けたたましい笑い声で、頭が空だと知れる」、「愚劣な笑いほど愚劣なものはない」などがあります。

一方日本には、「笑う顔は打たれぬ」、「笑う顔には矢立たず」、「笑う門には福来たる」など、笑顔で接していると憎しみが解け、家庭においても、いつも笑いにあふれ、和気あいあいとし、自然に幸福がやってくるという意味合いのことわざがあります。

又いろいろな会社を訪問して思うのは、緊張感はあっても、明るい笑いや笑顔のない職場は活気がなく、空気が淀んでいます。逆に笑いや笑顔に満ちた職場は活気にあふれ、さわやかな風が流れます。このさわやかな風こそ、職場の人間関係やコミュニケーションの基礎となるのです。

どのような業種においても、日々、弱肉強食、優勝劣敗の厳しい生存競争が繰り広げられています。いわば戦場です。だからといって、利潤ばかり念頭において険しい表情をしていては、誰も寄り付きません。

笑いは人生の花。心和らぐ笑いや笑顔を忘れた組織は、厳しい生存競争の中で、やがては淘汰される運命にあると思います。

（赤桐清司　記）

MEMBER'S MESSAGE

株式会社 水上工作所

当社は、昭和32年、鋼製缶用バンドメーカーとして製造・販売を開始いたしました。

地道な研究・開発、活発な営業の結果、現在では各種容器用バンド・天板だけでなく、プレス加工および容器用関連部品も生産・販売しております。

平成8年には水上メッキ工業株式会社を設立し、ユニクロメッキに対応する体制を整えました。

「顧客ニーズに迅速対応」・「品質至上」・「容器産業の手足となって奉仕する」をモットーに全社一丸となって邁進しております。

今後なお、品質の向上に努力し、よりご満足していただける製品を納入できるよう、一層努力してまいる所存でございます。

これからも引き続きご愛顧、ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

秋田ドラム工業 株式会社

当社は東北・北海道地方で唯一のドラム缶メーカーです。昭和28年ＪＩＳ工場の指定を受け、主として石油需要向の各種ドラム缶、アスファルト缶及びぶりき板製18Ｌ缶を製造してきました。

しかし第一次、第二次の石油危機を経過してドラム缶の需要構造が大きく変化しました。当社ではこの需要構造の変化に対応し石油以外の需要の開拓に積極的に取り組んでいます。ライン生産のオートメーション各社が取り上げない多品種少量の需要や特殊缶、溶接缶の生産等であります。近年ドラム缶の用途・種類も多様化し内容物も化成品、食料品、鉄加工品、容量も20Ｌから220Ｌ、型式もクローズ、オープン、複合缶など各種の容器を製造しております。またＬＰＧ配管工事、更生缶の製造販売の他、ＬＰＧボンベや家庭用石油貯蔵タンクなどの販売も取り扱っております。

《賛助会員》

エノモト工業㈱　三恵マツオ㈱　丹南工業㈱　㈱大和鐵工所
三喜プレス工業㈱　㈱城内製作所　東邦工板㈱　㈱水上工作所

ドラム缶工業会
東京都中央区日本橋茅場町3-2-10
（鉄鋼会館３階）
TEL 03-3669-5141　FAX 03-3669-2969

ADK 秋田ドラム工業株式会社
秋田市土崎港北6-2-22 ☎ 018-845-1105

川鉄コンテイナー株式会社
大阪市北区堂島浜2-1-29 ☎ 06-6344-9711

協和容器株式会社
新潟市下木戸2-4-20 ☎ 025-274-0371

鋼管ドラム株式会社
東京都中央区銀座8-11-11 ☎ 03-3574-0711

斎藤ドラム缶工業株式会社
横浜市鶴見区生麦3-15-14 ☎ 045-521-3881

山陽ドラム缶工業株式会社
岡山県倉敷市中島1230 ☎ 086-465-3680

新邦工業株式会社
東京都千代田区神田佐久間町4-18 ☎ 03-3861-5285

ダイカン株式会社
大阪市此花区島屋2-11-63 ☎ 06-6466-4601

大同鉄器株式会社
尼崎市杭瀬南新町3-2-21 ☎ 06-6488-2468

株式会社東京ドラム罐製作所
東京都葛飾区東四ツ木2-23-16 ☎ 03-3695-8511

東邦シートフレーム株式会社
東京都中央区日本橋3-12-2 ☎ 03-3274-6214

株式会社長尾製缶所
和歌山県有田郡吉備町野田144 ☎ 0737-52-2591

日鐵ドラム株式會社
東京都江東区亀戸1-5-7 ☎ 03-5627-2313

株式会社前田製作所
東京都港区新橋1-5-5 ☎ 03-3573-7101

森島金属工業株式会社
千葉県佐倉市大作2-5-5 ☎ 043-498-3551

株式会社山本工作所
北九州市八幡東区大字枝光1950-10 ☎ 093-681-2431

株式会社ユニコン
大阪府高石市高砂2-7 ☎ 0722-68-1721

ひびき　No.22（平成11年３月16日発行）
発行人　ドラム缶工業会
事務局長　藤野泰弘

本誌は再生紙を使用しています。